髮きず

大槻茂槙記

桂川國寧跋

洋学文庫
文庫8
A 90

特
178
41

大槻文庫

景樹文庫

世ゑ髪切といふてあり唐土にも髢髻狐
妖怪ありてこれる八髪切はてゝ多り口ばゝ
如何なることゝ年比疑しが其間ある人
の質問ふてくふ考へしハ和蘭り
「マーンシーキテ」病夜一名「ナクトワンデレン」夜游病
といふ病ありてく深更に目覺め諸作の
事業を営ミ高きふ登至深きに臨み
怪するこゝ日中はてゝに終ふ眠
ふたゝき夜あゝ目覺てく後ふ夜中の
所行を覺ゆることなり多血の人

ふあるとなく思ふに夢中の乱心なりさ
まざまの髪切と右の類ふ〳〵中人以下の
奴婢少女多〳〵若女ふあり凡そ女
性の髪を貴ふて生命ふ次く尊き
此常なれば心中に男女恋慕ふること切
なるゆゑに夢中に狂乱して自ら其
髪を切るふ〳〵あれしが覚て後ふその切
しこともを知らず怪こけるに狐狸の所致
あらんと世人風唱をなすこと多の
るに此病流行をつきものにつゝ女さるに

昔より髪切の流行あるハ人口ゆ出ること
にて真の髪切ふて非ざるべしさて髪切
といふ事あるにはきて悪少女恋人の為ふ
髪を切て去ぐほふ〳〵人にハ狐妖の
とゝいひなすものまた奴婢ハ主ゆ暇乞ひ恋人の方に至らんとせし策
とするとの余が面あり見聞せしこと
ゆ又髪切の流行ハ夜のゝゝ書ふ
しとなりたハ悪法師ありて人をそそら
ひ夜中夜々ふて少女の髪を切らし免

髮切の祈禱をしゝ戮貨を得んとする
ものとなり原來狐妖といへることあふ
るゝ所ふ非ず狐狸ハ人意を解するふゝ
頗る靈ある獸なれど人のゝちし奥鳥杯
を奪はんとして人類の真似をなし愚人
をたぶらかすものゝありと見へたりまた暗
夜ふ物を見ることゝ心の迷より出る形り
なるに狐つき杯いへる者ハ乱心すゝ熱
病の妄語と同しきに別ふ疾ある所なきゞ
故り是も狐狸のなきたること合に唱ふ

るなりまゝ狐をしたふふ杯いへる者ハ多く
人をしたふふ現ふ見聞せしことあり人を
たぶらかす人ハ靈ある者ハ悪キある人なれゝ
狐狸乃靈ある者ハ悪キある人なれゝ
つひ人を衒ふ益なるとなるまゝ今年
隻の頃よりゝ下總國ふゝ何とのゝ人なるまゝ
古碑を洗ひみゞき墨丹等を注けるあり
とゝ常陸國へ流布し冬の初より武藏國
ふ及ひ都下一般ふ流言し彼ハ祖父の石塔を
磨りふたり我ハ親の碑を磨りふたる杯口々

ふいひのゝしる余ぐ見及ひゝ寺々三四ヶ所を
石塔うつきありとゝゝ人の群集せゝるあ
まゝとも皆妄説なりさハ古塚を人志ゑを磨
けた功徳ある抔いふとゝりゝ為し始めし
ものあるゝを夫を奇怪の事にいひあゝし
雷同せるこゝゝ思たるゝなり古碑の苔むした
るを洗ひうつゝまゝ碑面ふ墨丹等を以ゝ
落書せしゝの抔毎々見及ひたり彼といひ是
といひ傳會の説ばかりゝいひ〻ゝるなり
ゝまゝらゝ流言に筆を費を色き赤水さ

國香堂藏

まゝゝも人の問しまゝにかゝハらいはけぬ

文政十三霜月寒ふ入る日茂楨記

世の中ゝいゝゝかゝるへきこの字疑惑の二字ゝゝ
ゝなり古来疑惑のゝきをしてまけて人を
ゝゝひゝるゝなゝ〻あゝてかゝふゝゝゝゝその二字
ハ何ゝりて起ゝゝ問ゝ理ゝ紀〻ぬゝり起ゝなり
理さゝ窮ひゝゝきいうゝのひ由ゝふゝをなきゝの
そのうゝひゝゝひゝり稱ゝゝよゝぬゝゝを
ゝゝ出ゝ中ふゝ怪といふことゝなり怪といふ
ゝもゝれ両眼両耳二手二足ゝ人の世界ふ

國香堂藏

てなきまでとゝ高うふ迫きこゑ物いうなるなみらく
きゝ怪異の説をいひのゝる中ふ去歳ゝ髪を
剃ふるをしひまする古き碑を洗ひ法もるこゝ
と児女ハたゞ紙幣をへしふ居て人のうゝひ
をも解くゝ人のそまゝ雷同ゝまゝとして
いひうやを余もわゝこゝその席ふつゝなりておこゝ
しやとおゝくゝともかゝまふさうふときいまなち
我ゝ身ふにくみうたのひをうゝ狐いこふきん髪
を考ふとゝふことは明季の書ゝ狐妖なりゝくく
又余の曾祖の老狐ゝ解剖せゝまゝしゝ胃ゝ

肉より髪の出ゝるもたゝしよしきたり狐ハ
他の獣ふ超くゝさうきゝそのなれハ愚昧なる児
女ゝ髪ふと切ゝるをハたゝまゝもおゝそふも又狐も
ゝゝおのれと切ゝるもあるゝゝ古碑を洗ふし
初のゝゝいふつゝふ功徳ゝ幸福ありおいよ愚想
ゝゝおこゝゝおまふ明翌ゝ涙くゝなるゝゝのふの
うたうひゝゝふく傳含ゝ説をゝてゝゝゝゝや
いゝゝさゝゝハ余ふうゝうひまゝふゝ恠ゝゝこゝハ
なゝやと問ゝゝゝゝまハ無ゝとハ答ゝゝそハの
といゝゝ居ふゝて君父を戮ゝハゝゝようなり

武家ふまもて弓矢ばとるをもきらひ驚ふまれて医学を修せさるはをもひなりされ理のなきをとらわすして事の有るをもとやまとふ怪むへくもうふくきるみてそうるくいうつうその義はをもいたるふるめかして因果をもいふなるなり今大槻大人の考ばよりみくく深く感るところはふより御ふ湯書をもうること志うり

辛卯廿六月中の七ゝ　國寧記

圖書寮藏